
バスにて

林茶々丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バスにて

【Nコード】
N7877Y

【作者名】
林茶々丸

【あらすじ】
高速バスで思いつきました。

(1)

「拘束バス」とはよく言ったもの。見知らぬ他人と数時間、ちょっと体を動かせば接してしまうような状況で過ごすのは苦痛だ。空いているときであれば、

「6列目より後ろはもう乗ってこれませんから」

という救いの言葉で移動できるのだが、そううまくはいかないことが多い。

シートベルトを探り出したり、肘掛を下ろしたり、足を組んだり、そんな1つ1つでも隣に気を使わなくてはいけない。

全席指定が恨めしく思えるとすれば、それだ。

車窓から眺める景色が、あのころと違っていいのか、彼女にはわからない。景色は確かに映っていたはずだが、それまで気にしたことなどなかった。車内を快適に過ごすため、ちょっとした飲み物や読み物を持ち込み、後は身を任せるだけだったから。

彼女は窓にそつと指をつけ、山々を眺める。

「あの町に住む人はどこへ買い物に行くのかな？ 結構山の中だよね。トラックが宅配してくれるのかな」

もうバスに乗ることもないのだと思うと、景色も名残惜しく感じた。あつという間に過ぎていく集落にも、人がいるんだと、彼女はぼんやり思う。

人によつてはバスを嫌う。

「バスよりも電車のほうが早いでしょう？」

「飛行機もあるんじゃない？」

「指定席なんていやじゃない？」

彼女はよくそんなことを言われた。

彼女は、月に一度実家へ帰るときには、毎回高速バスを利用して

いた。値段を考えれば、これが一番手ごろなのだった。特急を利用するのに比べて1時間余分にかかるけれど、約千円が浮く。

「私なら千円より時間を選ぶわ」

という人もいたけれど、彼女はあまり人生で急いでいなかった。

荷物が多ければなおさら、バスのほうが便利だ。網棚やひざに乗せたまま電車で揺られていると、スリにあいそうな気がして落ち着かないが、トランクルームに入れてしまえば安全である。

「そこまでしてケチらなくていいんじゃない？」

そんなこと、お構いなしだった。

どちらかと言えば童顔で、24歳の今も高校生に見える彼女は、あまり男性に免疫がなかった。しかし、バスの席は勝手に決められてしまうもので、そんな事情はもちろん無関係だ。

けれど、それがおもしろい出会いを生むこともあるんだと、彼女は知った。きつかけは、どこにでも転がっているかもしれない。

彼女がそのバスを利用するのは、それが5回目くらいだった。

女性専用席というものも設けられているのだが、そのときは埋まっていたため、一般の席を予約してあった。

彼女はあまり強いにおいが好きではないので、化粧品の匂いがぶんぶんする若い女性の隣よりは、ずっと眠っている中年男性の隣であったほうがましだった。隣で酒を飲まれても、彼女は比較的酔わないタイプだったので、平気だった。さすがに、靴を脱いでくさい足をさらされたときは辟易したけれども。

「2-C。ああ、通路側かあ」

彼女はため息をついた。窓側であれば、遠慮なく眠ってしまえるのだが、通路側は隣の相手が降車する可能性があるのです、起きる必要があった。

通路側のチケットだった場合、あんまり早く乗り込んでいると、「すみません。奥なんですけど」

といわれ、立ち上がって相手を通さねばなくなる。いつだったか、すいているからこないかもと踏んで窓側に座っていたら、

「私が窓側ですよね？」

と、きつそうな女性に指摘され、あわてたこともあった。

そんなわけで、彼女は発車2分前にバスへ乗り込んだ。トランクルームへパソコンと土産の入ったかばんをいれ、車内へ。彼女の隣である2-Dには、黒いシャツの男性が座っていた。ヘッドホンをつけて、まだ発車していないバスから外を眺めていた。たぶん、大学生だろうと思った。

「すみません」

「あ、はい」

思ったよりも低く、少しだみ声だった。

軽いやり取りで座ると、彼に接触しないよう気を使いながら、水筒のお茶をホルダーへ置き、ポーチをお腹の上へ。ポーチには、財布・ティッシュ・携帯電話・ハンカチ・絆創膏・生理用品・文庫本がはいっていて、これならサービスエリアでの用事にも十分だった。最初のころはかばんを車内に持ち込み、邪魔になったものだ。

彼は尻ポケットに財布を突っ込み、胸ポケットから音楽プレイヤーをのぞかせているだけで、荷物が少なかった。ストップウォッチがついていそうな時計。膝の白くなったジーンズ。茶色に染めて無造作に立てたような髪。取り立てて目立つところはなく、彼女がコンビニやスーパーで普通に見かける学生だった。

話しかけないのがルールのようなものだ。隣が異性であれば緊張するものだが、相手が窓の外に視線をやり、ずっと音楽を聴いていてくれるのであれば、こちらも好きなようにいていればよいだけのこと。

彼女は隣を気にしないよう、文庫本を広げた。

<このバスは、高速バス名古屋行きです。名古屋までの所要時間は・
>

お決まりのアナウンスが流れ、やがて車は道路に出た。

車が1時間ほど走ったところで、彼は舟をこぎ始めた。意外にまつげが長く、当然ながらまつげの色は黒で、髪は染めているのだと確信。彼女は、どちらかといえば黒髪のほうが好みだったが、こういう年下男性を「若いなあ」と心の中で冷やかすのも、ちょっと好きだった。

「音楽を聴いたまま眠っているということは、クラシックか何かかな？電池がもつたいないような気もするけど」

でも、彼女にはどんな音楽かなんてわからなかった。アパートから持ってきた推理小説を読みながら、ページをめくるついでに隣の彼をちらりと見てしまう。

「あゝおちる。わっ」

彼の頭が重力に従って下がり、はっと気づいて持ち上げ、でもまた数十秒後にはガクツと下がって・・・という繰り返しだった。

「いつそ寝てしまえばいいのに。でも、窓にもたれかかると不安だし、突っ伏してしまうにはテーブルが小さいし、いまさら背もたれを倒すのも後ろの人に悪いんだよね・・・」

と、自分の体験も振り返りながら、彼女は無駄にはらはらしてしまつたのである。やがて縦ゆれだけでなく横揺れも、つまり、彼女のほうへ倒れてきそうにもなつて、はらはらはさらに続くのだった。

「もしもたれかかってきたら、そのまま動かないほうがいいのだろうか？それとも、やっぱり払いのけるのが大人の対応だろうか？」自分のほうが年上であることも考慮し、彼女はそのときに備えた。

<まもなく、バスは　パーキングエリアに到着します>
バスが減速した

ガクン

ついに、彼の顔が肩に乗ってしまった。瞬間、どこかでかいだことのあるようなシャンプーの香りが鼻に届いた。

幸か不幸か彼女は尿意を覚えた。バスの狭いトイレなんていやだったし、このパーキングエリアはトイレがきれいだと知っていた。

「あの」

つついてみた。

「んゝ。んあ？」

彼は目を開け、手を「前ならえ」くらいまで浮かして背筋を伸ばし、きよろきよろと左右を見て、彼女に気づいた。

「あ……あれ？」

寝ぼけていたのか、驚いたような顔をした。

「あ、失礼します」

自分かもたれていたことに気づかなかった場合、起こしたことへの文句を言われる可能性もあったので、彼女はさっさとバスを降りた。

戻ってみると、彼はいなかった。2列目の通路で立っているのも、引き返すのも、邪魔になるような気がしたので、彼女は自分の席に座った。

「戻ってきたら謝るかなあ？名古屋までずっと眠っているつもりだったかもしれない。私も寝たふりをしたいけど、奥へ入ってもらっためにはその手は使えない」

もう一度立ち上がることも考えたが、断続的にほかの乗客が帰ってくるので、どうも動く気がそがれてしまった。

ずいぶん長く感じたが、おそらく2分もしないうちに彼が戻ってきて、

「あ、すみません」

と言った。手には、ほかほかの肉まん、確かこの地区にしかない味のものだった。聞いて・寝て・食べて。それなりにバスを楽しん

でいるのだろうと思った。

「あの」

「はい」

彼は決まりの悪そうな顔を見せた。

「くさかったらすみません。ジンギスカン味なんですよね」

「いえ」

「じゃ、遠慮なく」

彼がかぶりつくと、独特のにおいが車内に充満した。羊肉はあまり好きではなかったが、彼女は特に文句を言わないでおいた。やっぱり、肩を借りたことは覚えていないようだった。すこし、期待はズレだった。

(2)

月に一回、それも週末に同じ時刻の便を利用していれば、見覚えのある顔を見つけることもある。時には、帰りの便でも同じ顔を見ることがあってある。

彼女は、翌月にも彼の隣になってしまった。彼が彼女を覚えているのかいないのか、その反応からは分からなかった。そして、やっぱり同じようなやり取りで席に着いた。

今回も彼女が通路側の席であり、彼は眠らなかった。もし寄りかかってこられたらどうしようかと、体の半分を緊張させていた彼女だったが、その心配はなかったわけである。降りたとき、片方の肩が少しばかりこってしまっていた。

「向こうも意識して起きていたのかな？」

それは考えすぎだろう。異性を意識しすぎる自分に、彼女はつつこみを入れた。

彼と隣り合う3回目、今度は彼女が窓側だった。3ヶ月続けて、3度目で、さすがに彼も認識してくれたようだった。立ち上がって彼女を通すとき、その顔に驚きが見えた。

彼女は文庫本を読み始め、彼は音楽を聴き始めた。前の2回と同じようにして。

くすみません。この先で事故があって通行止めになったという情報が入りました。

その処理が終わるまで30分はかかるそうです。

一般道は山道でバスが通れないので、待機することになります。

最寄りの　パーキングエリアにバスを停めますので・・・>

運転手がそうつげ、バスをパーキングエリアに駐車した。

彼女は特に外へ出る気もなかったもので、そのまま座っていた。エコノミークラス症候群になつては困ると、一瞬思ったが、30分くらいならいいかと思い直した。外は寒そうだったのだ。

30分すると、彼が缶コーヒー片手に戻ってきた。プルトップが空けられ、香ばしい香りが彼女の鼻にも届いた。

<まだ通行止めが解除されません。もう30分延ばしたいと思います。>

文庫本は読み終わってしまった。仕方ないからメールでも打とうか、と思つたら充電が今にも切れそうだった。かろうじて実家へ遅れる旨をメールできたが、送信完了と同時に画面は真っ暗になつてしまった。

横にいる彼は、缶コーヒーをテーブルにおいてため息をついた。音楽プレイヤーのボタンを何度か押し、イヤホンをはずしてポケットへ押し込んだところからすると、こちらも充電切れらしかった。

仕方がないので、彼女は次の30分を、みやげ物店やコンビニをぶらつくことでつぶした。提供されるスナックや麺類はあまりおいしそうではなかったし、おなかも空いていなかった。だから、結局缶コーヒーだけ買って席に戻った。

運転手がまたしても同じことを言つたとき、彼女はコーヒーを飲み干していた。大きなため息をついた彼女に、

「缶捨ててきましょうか？」

と彼は言った。彼女がためらいがちにうなずくと、彼は外へ出て行った。

彼女が戻ってきた彼にお礼を言つと、彼は軽くうなずいた。

「なかなか動きませんね」

「そうですね。明日は従姉の結婚式があるんで、さっさと着きたいんですが」

「それは、おめでとうございます」
彼はまた軽くうなずき、とうせ暇だから、と話を続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7877y/>

バスにて

2011年11月23日14時46分発行